

令和6年度 墨田区立第三吾孺小学校 学校経営計画・経営報告書（自己評価・学校関係者評価）

作成者 校長 川中子登志雄（代表）

| | |
|--------|--|
| 学校教育目標 | 自立—自ら学び、考え、行動する人 共生—思いやりをもち、共に生きる人 健康—しなやかで丈夫なところからだをもつ人 |
| 目指す学校像 | 「すべてはみんなの笑顔のために」 三吾小に集う子供、保護者・地域、そして教職員 すべての人の笑顔があふれる学校 |
| 目指す児童像 | 「学ぶ」ということを通して、思いやりの上に立つ真の教養と品格を身に付けようとする子供 そのため、主体的(Proactive)に生きる子供 |
| 目指す教師像 | ①教育への情熱と使命感にあふれる教師 ②自らも学び、子供と共に感動できる教師 ③社会人としての教養と品格のある教師 |

○令和6年度 学校経営計画における重点内容

教育目標「自立 自ら学び、考え、行動する人」を重点目標とし、全教育活動を通して児童の主体性を育成する。令和6年度は、特に「学習時間」の改革を通して、令和の日本型学校である「子供が『主語』になる学校」づくりを推進する。

- ・教師主導の一斉指導からの完全脱却を目指す。
- ・学校独自の学習過程を確立し、児童が進める「セルフ授業」や「单元内自由進度学習」を日常の「学習時間」とする。
- ・生活・総合的な学習の時間を使って「課題解決学習・探求学習(Project-based Learning)」に挑戦させる。
- ・学習時間の改善を中心とした学校改革により、一体的に特別支援・インクルーシブ教育を推進する。

| 項目 | 取組目標 | 具体的方策 | 取組指標 | | 成果指標 | | 分析 | 改善方策 | 学校関係者評価 | | |
|---|--|---|--------------------------------|---|--|---|----|------|---------|------|-----|
| | | | | 評価 | | 評価 | | | 自己評価 | 改善方策 | 意見等 |
| 児童の教育（人権尊重教育・各教科指導等・生活指導） | 【人権尊重】 全教育活動を通して、「思いやりをもち、共に生きる人」となる資質・能力を育成する。 | 協働的な学びを日常化し、児童が主体となる学級づくりを推進することによって、いじめや不登校の起こりにくい、心理的安全性の高い集団づくりを、組織的に行う。 | 4 | 教アで90%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答 | 4 | 認知したいじめ問題に100%対応、95%以上改善・停止 | | | | | |
| | | | 3 | 教アで80%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答 | 3 | 認知したいじめ問題に100%対応、90%以上改善・停止 | | | | | |
| | | | 2 | 教アで70%以上の教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応したと回答 | 2 | 認知したいじめ問題に100%対応、80%以上改善・停止 | | | | | |
| | | | 1 | 教アで教員が心理的安全性の高い集団づくりに組織的に対応した教員が70%未満 | 1 | 認知したいじめ問題に100%対応、改善。停止80%未満 | | | | | |
| | 【特別支援・インクルーシブ教育】 個別最適な学びを保証し、個に応じた支援の一層の充実を図る。 | 個々の担任や学年だけに責任を負わせることのないよう、特別支援部を中心に、関係諸機関と連携し、組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたる。そのために「まなびの教室」との連携、学習室「みどり」の活用を推進する。 | 4 | 教アで95%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答 | 4 | 不登校出現率7%以内かつ学校との接点維持98%以上 | | | | | |
| | | | 3 | 教アで90%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答 | 3 | 不登校出現率8%以内かつ学校との接点維持98%以上 | | | | | |
| | | | 2 | 教アで80%以上の教員が組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答 | 2 | 不登校出現率9%以内かつ学校との接点維持98%以上 | | | | | |
| | | | 1 | 教アで組織的に特別な配慮を要する児童（とその家庭）の支援にあたったと回答教員が80%未満 | 1 | 不登校出現率10%以上または学校との接点維持98%未満 | | | | | |
| | 【児童の主体性の育成】 児童が将来自らウェル・ビーイングを獲得できるようにするため、「自ら学び、考え、行動する」主体的な態度を身に付け、自己肯定感を高める。 | 年間専属講師の指導を受け、「児童の主体性の育成」をテーマに研究を行い、教師主導の一斉指導からの脱却を図り、児童が主体となる「学習時間」を創出する。 | 4 | 教アで90%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答 | 4 | 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に85%以上回答 | | | | | |
| | | | 3 | 教アで80%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答 | 3 | 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に80%以上回答 | | | | | |
| | | | 2 | 教アで70%以上の教員が当事者意識をもって研究に取り組んだと回答 | 2 | 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に75%以上回答 | | | | | |
| | | | 1 | 教アで当事者意識をもって研究に取り組んだと回答した教員が70%未満 | 1 | 児童アで「めあてに向けて自分たちで考えて学習することができた」に75%以上未満 | | | | | |
| 異学年交流による「遊び」の時間を週時程に位置づけ、児童同士が「遊び」を通して主体性や社会的スキルを高めることのできる時間を保証する。教員は、できる限り「子供に任せる」ようにする。 | | 4 | 教アで80%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答 | 4 | 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」に85%以上が肯定的回答 | | | | | | |
| | | 3 | 教アで70%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答 | 3 | 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」に80%以上が肯定的回答 | | | | | | |
| | | 2 | 教アで60%以上の教員が「子供に任せることができた」と回答 | 2 | 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」に70%以上が肯定的回答 | | | | | | |
| | | 1 | 教ア「子供に任せることができた」と回答した教員が60%未満 | 1 | 児童アで「縦割り班活動で異学年と楽しく『遊ぶ』ことができた」と肯定的回答が70%未満 | | | | | | |
| 【学力の向上】 1 主体的・対話的で深い学びを実現させるために、これまでの指導法を見直し、児童主体の学習時間を創出する。 2 主体的な家庭学習の習慣を身に付けさせる。 3 児童の自己肯定感を高めるための評価の在り方について研究する。 | 7月までに学校としての学習過程スタンダードを確立し、児童が自ら学習を進める「学習時間」を日常化する。後期からは、单元内自由進度学習やPBL(探求・課題解決学習)に挑戦する。 | 4 | 7月までにスタンダード確立。後期からPBL等に挑戦できた | 4 | 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に80%以上回答 | | | | | | |
| | | 3 | 9月までにスタンダード確立。後期からPBL等に挑戦できた | 3 | 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に70%以上回答 | | | | | | |
| | | 2 | 10月までにスタンダード確立。後期からPBL等に挑戦できた | 2 | 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に60%以上回答 | | | | | | |
| | | 1 | スタンダードを確立できなかった。PBL等に挑戦できなかった。 | 1 | 児童アで「自分たちで学習を進められるようになった」に60%以上未満 | | | | | | |
| | 6月までに、学力向上部を中心に、従来型の宿題に代わる家庭学習の在り方について、「新・家庭学習の手引き」としてまとめ、「学び方」を指導する。 | 4 | 6月までに作成し、指導を開始した。 | 4 | 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に80%以上回答 | | | | | | |
| | | 3 | 7月までに作成し、指導を開始した。 | 3 | 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に70%以上回答 | | | | | | |
| | | 2 | 9月までに作成し、指導を開始した。 | 2 | 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に60%以上回答 | | | | | | |
| | | 1 | 前期中に作成できなかった。 | 1 | 児童アで「自分で考えて家で学習することができた」に60%以上未満 | | | | | | |
| | 評価検討プロジェクトチームを発足し、形成的評価を充実させ、10月までに通知表に代わる総括的評価として活用するための仕組み作りを行う。12月までに保護者に説明を行い、R7年度より通知表の全面改定を行う。 | 4 | 10月までに仕組みを作り上げることができた。 | 4 | 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に80%以上回答 | | | | | | |
| | | 3 | 11月までに仕組みを作り上げることができた。 | 3 | 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に75%以上回答 | | | | | | |
| | | 2 | 12月までに仕組みを作り上げることができた。 | 2 | 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に70%以上回答 | | | | | | |
| | | 1 | 1月までに仕組みを作り上げることができなかった。 | 1 | 保アで「子供が学校で成長した内容が伝わっている」に70%以上未満 | | | | | | |

| 項目 | 取組目標 | 具体的方策 | 取組指標 | | 成果指標 | | 分析 | 改善方策 | 学校関係者評価 | | |
|-------------|---|---|------|---------------------------------------|------|------------------------------------|----|------|---------|------|-----|
| | | | | 評価 | | 評価 | | | 自己評価 | 改善方策 | 意見等 |
| 家庭・地域連携 | 【地域と協働した子育て】 地域の教育財産を生かし、地域から学ぶ機会を教育活動に位置づける。 地域を愛し、誇りに思う児童の心情を育てる。 | 年間を通して、ゲスト・ティーチャーによる体験的な学習の充実を図る。9月のキャリア教育特別授業等、各学年・年3回以上の特別授業の実施を目指す。 | 4 | ゲストティーチャーを活用した授業を年間で3回以上実施、全体で20回以上実施 | 4 | 児童アで90%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答 | | | | | |
| | | | 3 | ゲストティーチャーを活用した授業を年間で3回実施、全体で18回以上実施 | 3 | 児童アで80%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答 | | | | | |
| | | | 2 | ゲストティーチャーを活用した授業を年間で2回以上実施、全体で15回以上実施 | 2 | 児童アで70%以上が「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」と回答 | | | | | |
| | | | 1 | ゲストティーチャーを活用した授業を年間で2回未満実施、全体で12回未満実施 | 1 | 児童アで「ゲストティーチャーと楽しく学習ができた」の回答が70%未満 | | | | | |
| | 【開かれた学校】 積極的に教育活動の情報発信を行い、保護者・地域の学校教育への理解を深め、教育活動への参画を促す。 | HP、学校便り、学校公開、動画通信、校長「語りサロン」等を通して、学校の教育活動を発信するとともに、各種アンケート等を実施し保護者・地域の願いやニーズを把握する。 | 4 | 保アで90%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答 | 4 | 保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答90%以上 | | | | | |
| | | | 3 | 保アで85%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答 | 3 | 保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答80%以上 | | | | | |
| | | | 2 | 保アで80%以上が「学校は積極的に情報を発信している」と回答 | 2 | 保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答70%以上 | | | | | |
| | | | 1 | 保アで「学校は積極的に情報を発信している」と回答とした保護者が80%未満 | 1 | 保アで「学校の教育活動がよく分かる」に肯定的回答70%未満 | | | | | |
| | 【コミュニティー・スクール】 墨田区教育委員会と連携し、学校の経営母体をコミュニティー・スクール化する。 | 6月までに情報収集を行い、現在の学校運営連絡協議会に説明を行う。11月までに人選を行い、新たな組織を立ち上げるための準備をする。 | 4 | 10月までに組織を立ち上げることができた。 | 4 | 学運協アンケートCSについて十分に理解した80%以上 | | | | | |
| | | | 3 | 11月までに組織を立ち上げることができた。 | 3 | 学運協アンケートCSについて十分に理解した70%以上 | | | | | |
| | | | 2 | 12月までに組織を立ち上げることができた。 | 2 | 学運協アンケートCSについて十分に理解した60%以上 | | | | | |
| | | | 1 | 1月までに組織を立ち上げることができなかった。 | 1 | 学運協アンケートCSについて十分に理解した60%未満 | | | | | |
| 学校の管理運営・教職員 | 【教職員の資質・能力の向上、サービスの向上】 校内研究を通して、令和の日本型学校教育を支える教職員の資質・能力を育成する。 | ・服務事故防止研修会を毎月実施し、服務事故を起こさない、起こさない教職員集団の気運を醸成する。 ・朝礼講話、INAHOによる資質向上研修を実施する。 | 4 | 教アで90%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答 | 4 | 事故件数0、保アで教職員の信頼度90%以上 | | | | | |
| | | | 3 | 教アで85%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答 | 3 | 事故件数0、保アで教職員の信頼度85%以上 | | | | | |
| | | | 2 | 教アで80%以上の教員が当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答 | 2 | 事故件数0、保アで教職員の信頼度80%以上 | | | | | |
| | | | 1 | 教アで当事者意識をもって服務研修に取り組んだと回答した教員が80%未満 | 1 | 服務事故発生、または保アで教職員の信頼度80%未満 | | | | | |
| | 【適切な学校評価】 組織的・計画的な「学校評価」を実施し、経営改善を図る。 | 5月より学校経営計画・経営報告書の作成を組織的に行い、教職員の学校経営参画を促すと同時に、児童、保護者・地域の願いやニーズを踏まえた経営改善を図る。2月中にR7年度に向けた改善案を示す。 | 4 | 教アで95%以上の教員が学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答 | 4 | 保アで「子供を入学させて良かった」に肯定的回答90%以上 | | | | | |
| | | | 3 | 教アで90%以上の教員が学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答 | 3 | 保アで「子供を入学させて良かった」に肯定的回答85%以上 | | | | | |
| | | | 2 | 教アで80%以上の教員が学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答 | 2 | 保アで「子供を入学させて良かった」に肯定的回答85%以上 | | | | | |
| | | | 1 | 教アで学校経営計画の目標実現のために努力をしたと回答した教員が80%未満 | 1 | 保アで「子供を入学させて良かった」の回答85%未満 | | | | | |
| | 【教職員の働き方改革】 学校改革を一体的に推進し、教職員の過重労働を解消する。 | 研究を中心に学校改革を推進し、一体的に教職員の働き方を改善する。週あたり在勤時間50時間超の教職員を20%以下に抑え、教職員に年6日以上の「充電休暇」を取得できる環境を整える。 | 4 | 教アで90%以上の教員が目標を達成したと回答 | 4 | R6ストレスチェック総合健康リスク100%未満 | | | | | |
| | | | 3 | 教アで80%以上の教員が目標を達成したと回答 | 3 | R6ストレスチェック総合健康リスク100% | | | | | |
| | | | 2 | 教アで70%以上の教員が目標を達成したと回答 | 2 | R6ストレスチェック総合健康リスク102% | | | | | |
| | | | 1 | 教アで目標を達成したと回答した教員が70%未満 | 1 | R6ストレスチェック総合健康リスク104%以上 | | | | | |

○令和6年度 学校経営報告のまとめ（総括）